九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

性別による労働力人口の差が福岡市の都市構成の予測に与える影響に関する研究 : 産業施設における従業者の構成比率及び事業所数の変化を中心に

林, 秋月

https://doi.org/10.15017/1470600

出版情報：九州大学, 2014, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名	林　秋月
論　文　名	性別による労働力人口の差が福岡市の都市構成の予測に与える影響に関する研究 ―産業施設における従業者の構成比率及び事業所数の変化を中心に―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　准教授　　鵜飼　哲矢 副　査　　九州大学　　教　授　　土居　義岳 副　査　　九州大学　　准教授　　田上　健一

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

林秋月氏の博士論文の特筆すべきところは、都市の人口予測の際に女性の労働力を加味することでより詳細な都市構成の予測ができるという点にある。福岡市の人口構成の動態を詳細に調査・分析し、産業により女性労働者がどの分野でどの地域に分布してゆくのかを研究したものである。女性人口が多い福岡市においては将来の都市構成の予測の際に商業施設と福祉厚生施設での従事者の動向が大きな要因になっている。最近発表された政府の国立社会保障・人口問題研究所の人口再生産力に着目した人口推計モデルに対して、この論文で提示された女性の雇用人口モデルを加味すれば、さらに正確な予測効果が生まれるだろう。また、人口予測だけでなく地域計画、地域政策、など自治体が都市政策に応用できるデルにもなる点でも独創的であり学術的に意義深い内容になっている。

本論文は 6 章により構成される。論文は、「序論」「性別比率特徴と生活要素による各施設に与える影響」「都市施設の選定と従業者数及び事業所数の変化実態」「商業施設の変化傾向による都市構成の予測」「厚生福祉施設の変化傾向による都市構成の予測」「結論」により構成されている。また、本論は、福岡市が女性人口比、とくに若い女性の人口比が日本の主要都市のなかで最も高いことに着目し、そのことが種別産業従業者構成、産業構造、ひいては福岡市内各地区での産業比率の現状と将来にどう影響を与えるかを分析し予測するものである。

論文を構成する資料として福岡市総務企画局企画調整部発行の「福岡市の将来人口推測」、福岡アジア都市研究所による最新の人口統計データを活用し、方法論としてはセノレ・オートマトン、コーホート要因法がもちいられ、多くの項目について分析がなされ、結論として、たとえば女性がかかわる厚生福祉施設では、市内東部では既存施設の再開発、西部では積極的な新規施設建設が予測されるなど、明確な未来予想、ビジョンが提示されている。

第 1 章では、序論として福岡市の都市問題および、既往研究について述べられ、本論文の目的・意義が述べられている。ここでは研究の方法や対象などが詳細に説明され、データ解析に用いる数式などの説明も行っている。

第 2 章は「性別比率特徴と生活要素による各施設に与える影響」が検討され、個人属性差による平日と休日の日常生活行為の推移方向および人口推計の実態を明らかにしている。

第 3 章では「都市施設の選定と従業者数及び事業所数の変化実態」が述べられ、産業構造と都市構造、就業人口構造の関係性や、性別によって強く影響を受ける都市施設の抽出が得られている。

第 4 章では、第 3 章で抽出された都市施設の中から「酪業施設の変化傾向による都市構成の予測」を取り上げ、第 5 章では「摩生福祉施設の変化傾向による都市構成の予測」が取り上げられている。どちらも施設の変化傾向を定性的定量的に予測することによって、性別による都 市空間構成の変化

方向を提示している。

第 6 章の結論では、本論文で得られた結果を総括してまとめている。これは、GIS を用いて現在の各施設の土地利用状況を分析するとともに、事業所・企業統計調査と福岡市の将来人口推計の資料を使って、将来の就業人口および事業所の動向を分析したものである。その分析を用 いて福岡市各区について、将来の変化傾向を把撮することができる。

これまでの都市の人口予測研究は、一括でハード的・量的な要素である土地利用のみを把握することを中心に行われてきたが、実際に都市の中で生活する生活者の属性的な視点、即ち、ソフト的・質的な要素に対する既往研究は行われてこなかった。ここに性別、特に女性労働者の視 点を加味することによってより正確な変化方向が予測されることは著者の独創的な着眼点であり、男女雇用機会均等法、若い女性人口の激減が予想される日本の近未来という日本社会の趨勢のなかで時宜を得た主題設定である。リニアで機械的なプロセスで完成形を描いてそこを目指す 20 世紀型都市計画ではなく、客観的な近未来予測をしつつ、時代状況に応じて無理なく変容してゆくマネジメント型 21 世紀都市計画にふさわしい方法論にもとづいていることが高く評価された。さらには女性をまず勤労者として観察し、さらに勤労者が収入を得て最後は消費者に転化してゆく、いわば産業の連鎖によって都市が形成され発展してゆく都市産業アルゴリズムの新しい思想が示唆されている、と審査員から評価された。

また、この論文の意義として、広く共有されている問題意識に対して、客観的なデータ、的確な方法論、新しい都市ビジョンをもって答えるもので、都市論として完結するのみならず、実際に都市行政にも指針を与えられる論文として評価された。

従って、本論文は博士(芸術工学)の学位論文として合格であると論文調査委員全員が認めた。